

# 病 理 学

【単位数：2.5単位，授業36コマ，予備1コマ(定期試験含まず)】

## 1 科目責任者

笠井謙次 教授(病理学)

## 2 教育目標

### (1) ねらい(Ⅲ-3-c, Ⅲ-4-c)

- ① コアコンピテンスである「医学知識と科学的探究心」を理解するため，疾患の概念，基本的事項を理解し，病因・病態の基礎医学的要素と共に，鑑別と治療につながる病態を学ぶ。
- ② 人体に発生する様々な疾患を，「細胞傷害・変性と細胞死」，「染色体・遺伝子異常」，「代謝障害・退行変性」，「循環障害」，「炎症と創傷治癒・感染症・免疫異常」，「腫瘍」に分類し，その様態を学ぶことにより，疾病の成り立ちの基本メカニズムを理解することを目指す。

### (2) 学修目標

- ① ゲノム・染色体・遺伝子の異常と疾患との関係を説明できる。
- ② 細胞障害・変性・細胞死の病因と形態学的変化を説明できる。
- ③ 代謝異常による病態を説明できる。
- ④ 循環障害・臓器不全の病因と病態を説明できる。
- ⑤ 炎症・感染症・創傷の概念と経時的変化及び治癒過程，免疫異常による疾患を説明できる。
- ⑥ 腫瘍の概念・分類・定義と病態・進展過程及び病理所見を説明できる。

## 3 成績の判定・評価

### (1) 総合成績の対象と算出法

	成績対象	割合	方法・コメント
定期試験	○	40%	多肢選択問題を原則とし，一部記述式を含む場合がある。 試験範囲は9/4(金)1限～11/12(木)5限の講義・AL・CBL・病理学実習の全て及び別途指示した教科書の該当範囲，課題学修。 なお病理学実習のレポート完了を病理学実習単位修得及び病理学修了の条件とする。また不十分なレポートは再提出を課す。詳細は病理学実習の項を参照。
小テスト1	○	35%	多肢選択問題を原則とし，一部記述式を含む場合がある。 試験範囲は9/4(金)1限～9/25(金)2限の講義・ALと別途指示した教科書の該当範囲，課題学修。ただし9月28日(月)2限「小テスト1解説」は出席を取り，定期試験の出題範囲とする。詳細は9月4(金)1限「ガイダンス」にて説明する。 【再評価について】 やむを得ない理由で欠席した場合，当該の追試の機会を設定する。
小テスト2	○	25%	多肢選択問題を原則とし，一部記述式を含む場合がある。 試験範囲は9/29(火)3限～10/9(金)1限の講義・ALと別途指示した教科書の該当範囲，課題学修。ただし10月13日(火)2限「小テスト2解説」は出席を取り，定期試験の出題範囲とする。詳細は9月4日(金)1限「ガイダンス」にて説明する。 【再評価について】 やむを得ない理由で欠席した場合，当該の追試の機会を設定する。
態度	○	—	態度が著しく不良の場合は，総合成績の10%を上限として減点をする。

出席： 定期試験を受験するためには欠席率が3分の1を超えてはならない。

## (2) 合格基準

小テスト1・小テスト2及び定期試験を合算して総合成績とする。総合成績が60点以上を合格とする。

ただし、実習レポート完了を条件とする。

また、著しく受講態度不良の場合、総合成績の10%を上限として減点したものを最終的な総合成績とする。

## (3) 再試験・再評価の方法

上記(2)で総合成績が60点に満たない場合、100点満点の再試験を行い60点以上を合格とする。再試験では、講義・AL・CBL・病理学実習の全てと別途指示した教科書の該当範囲、課題学修を試験範囲とする。

試験形式は多肢選択問題を原則とし、一部記述式を含む場合がある。

## (4) 課題(試験やレポート)へのフィードバック

小テスト1の結果が6割に達しない場合は個別に成績を開示し、今後の学修への取り組み方の改善を促す。

小テスト1及び定期試験の結果概要を学内メールで開示する。これにて各自の理解が不十分な項目の再確認を促すとともに、再試験対象となった者は再試験に備える。また9月28日(月)2限「小テスト1解説」と10月13日(火)2限「小テスト2解説」において小テストの解説と各々試験範囲の復習を行うことで、定期試験に向けた準備を教授する。詳細は9月4日(金)1限「ガイダンス」にて説明する。

## 4 教科書

書名	著者名	出版社	教科書として指定する理由
標準病理学	坂本穆彦 監修	医学書院	学修内容が網羅されている。

## 5 参考図書

書名	著者名	出版社	参考図書とする理由
集中講義 病理学	清水道生 内藤善哉 編集	メディカル ビュー	テーマごと簡潔に記載され、要点が良く纏まっている。
ロビンス 基礎病理学	豊國伸哉 高橋雅英 監訳	丸善出版	記述にストーリー性があり秀逸。
日本病理学会「病理コア画像」 <a href="http://pathology.or.jp">http://pathology.or.jp</a>	日本病理 学会教育 委員会	日本病理学 会	付)病理学総論的索引を参照。 登録疾患が厳選されている。

## 6 準備学習(予習・復習)

- 教科書又は参考図書の該当範囲を予習すること(1日あたり15分間)。
- 講義資料、教科書又は参考図書の該当範囲を復習すること(1日あたり1時間)。
- 病理学講義では極めて多くの専門用語を学ぶ。これらの定義・意味を正確に理解すること。
- 疾患のメカニズムについて、ストーリー性を持った論理的説明ができるよう学修すること。教科書で記述不十分な箇所は参考図書(特にロビンス基礎病理学)での学修を薦める。
- 教科書・参考図書(特に日本病理学会「病理コア画像」)や実習標本を通じて、病理組織像に慣れ親しむこと。
- 異常と正常とは表裏一体である。適宜解剖学、生理学、生化学、免疫学等の振り返り学修を行うこと。

## 7 授業計画

### (1) 講義の方法

基本的に大教室での知識伝達型の講義であるが、講義中、一部、小グループ討論や講師との質疑応答などのアクティブ・ラーニング(AL)を実施する。症例提示を含めた case-based learning(CBL)を実施する。また、10月5日(月)3限「ビデオ学修」では各自昨年度の講義ビデオを視聴し10月6日(火)3,4限「腫瘍1,2」(反転授業)の準備を行う。詳細は9月4日(金)1限「ガイダンス」にて説明する。

### (2) 講義の内容

講義資料を基に、適宜スライドにて病理組織画像を提示しつつ講義を行う。